

(仮 訳)

プレス・リリース

2013 年 7 月 5 日
バーゼル銀行監督委員会

バーゼル委員会が銀行勘定のリスク・アセットの整合性に関する報告書を公表

バーゼル銀行監督委員会(以下「バーゼル委」)は、本日、銀行勘定における信用リスクのリスク・アセット(RWA)に係る規制上の整合性に関する最初の報告書を公表しました。本調査は、バーゼルⅢの枠組みの整合的な実施を確実にすることを目的とする、包括的な規制上の整合性評価プログラム(RCAP)の一環として実施されたものです。本調査では、100 行を超える主要銀行から得た監督上のデータならびに仮想ポートフォリオ分析の一環としてソブリン、銀行および事業法人向けエクスポージャーについて国際的に活動する主要 32 行から徴求した追加的なデータを活用しています。

銀行勘定における信用リスクの平均的なリスク・アセットには銀行間で相当な差異が存在します。本日公表された調査によれば、リスク・アセットの差異の大部分は銀行の資産構成の大まかな相違によって説明が可能であり、リスクベースの自己資本の枠組みで意図されている銀行のリスク選好度の違いを反映しています。しかしながら、銀行や監督当局の実務の違いによる差異も大きいとみられます。

本調査では、仮想ポートフォリオ分析を通じ、銀行間において債務者に関する相対的なリスクの度合いの評価は極めて整合的であることが判明しました。すなわち、銀行による個別債務者のポートフォリオの格付には高い相関関係が存在します。しかしながら、デフォルト率(PD)およびデフォルト時損失率(LGD)として表される銀行が推計するリスクの水準には違いがみられます。これらの違いは個別の銀行の実務に起因するリスクウェイトの差異を引き起こし、10 パーセントをベンチマークとしたリスクベース自己資本比率に引き直した場合、殆どの銀行の自己資本比率は小幅な差異に止まるものの、いくつかの突出したケースでは当該比率から上下 2 パーセント・ポイント(あるいは相対的には 20 パーセント)にも及ぶ差異が生じ得ます。

いずれのアセットクラスの中でも著しく突出したケースがみられる中で、事業法人向け債権では銀行が平均値近傍に集中する傾向が最も顕著にみられる一方、ソブリン向け債権における差異は最も大きくなっています。今回用いられた仮想ポートフォリ

オが低デフォルト・ポートフォリオの特徴を有し、リスク推計のための適切なデータが存在しないことが、とりわけソブリンおよび銀行向け債権の LGD 推計において、銀行間の相違を招く一要因となっている可能性があります。

本報告書は、実務の違いにより生じる過度の差異を最小化するためにバーゼル委が選択しうる政策オプションに関する暫定的な議論も含んでいます。バーゼル委は、自己資本の枠組みがリスク感応的であり続けることを確保する必要性を認識していますが、同時に銀行による規制上の所要自己資本計測の比較可能性の向上も促していく所存です。

バーゼル委議長を務めるリクスバンクのステファン・イングベス総裁は、本報告書について、「内部格付手法ではリスクウェイトがある程度相違するのは当然のことですが、今回観測された大きな差異はより一層注意深くみていく必要があります。当面は、本調査から得られた各行の相対的な立ち位置に係る情報を基に各国当局や銀行自身が整合性の向上を図るべく対策をとることになります。更に、バーゼル委は、規制上の自己資本比率の比較可能性を向上させ、銀行のディスクロージャーを拡充させるこれまでの一連の作業の一環として今回の分析結果を活用していきます。バーゼル委は、所要自己資本の計測結果の整合性を監視し、今後の改善状況を評価するための同様の分析を検討していきます」と述べました。